

「原住民」の自己認識

文人の武蔵野

「文人の武蔵野」の連載も4年を超えました。まだ取り上げていない作家や作品がたくさんあるのですが、ここで少しふりかえって整理しておきたいことがあります。

それは、文人たちそれぞれが「武蔵野」と呼び表現して

三浦朱門 ①



作家の三浦朱門

きた武蔵野のほとんどは、外から来訪する者の眼差し、移住してきた者の眼差しによる

ものだったということですが。いつの時代でも外来者の視点で地域を活性化するという現象がみられます。そもそもひとつの場所を表象する諸言説の多くは外部を介したものであると言えます。

しかし、武蔵野人による武蔵野人のための武蔵野という場所は表象されてこなかったのでしょうか。あるいは、代々武蔵野で生まれ育った生粋の武蔵野人は表象されてこなかったのでしょうか。

そうした疑問に答えてくれるのが三浦朱門（1926～2017年）の小説「武蔵野インディアン」（『文藝』1

981年4月号）です。小説には、「原住民武蔵野インディアン」と自称する武蔵野人たちが登場します。そして、武蔵野での200年越しの暮らした武蔵野インディアンとしての自己認識が見いだされます。

武蔵野インディアンと称する人たちは、近代化の過程で東京は武蔵野を呑み込み「植民地」にしていったという歴史観を共有しています。武蔵野を植民地化した主体は「東京白人」と呼ばれます。アジア・アフリカの大部分を植民地化し、先住民から土地を収奪した存在としての「白人」

に東京人を喩えているようです。武蔵野インディアンに言わせると、「江戸」は「新開地」となり、「東京白人」は開拓者であり支配者となるのでしよう。

次回以降、この「武蔵野インディアン」を通じて武蔵野について考えていきたいと思っています。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）



過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。